

「歴博本江戸図屏風」と鴻巢人形

小泉 和子

はじめに

- 一 人形を飾った家はなにか
- 二 浅草橋通りの人形店
- 三 疱瘡除けの赤物
- 四 鴻巢と浅草
- 五 鴻巢の練物による赤物

論文要旨

「歴博本江戸図屏風」の右隻第五扇と六扇の下部に人形を並べた家が描かれているが、この家は人形店であること、しかも並べてあるのは当時、幼児の疱瘡除けとして使われた土人形か張り子の赤物であるということがよみとれる。この場所は浅草寺の門前通りであると判定されるが、この地域は江戸時代から近代に至るまで人形産地であった。このことは貞享四（一六八七）年の『江戸鹿子』をはじめとして幾多の地誌類によって確認される。しかも当初は素朴な土人形や張り子人形であって、後世のいわゆる雛人形とよぶ着付け雛にかわるのは一八世紀前期の享保年間からだという。するとこの情景は、素朴な人形として描かれていることからみてすくなくとも一八世紀にまで下がることはないだろう。

浅草ではじまった赤物は、やがて武州の鴻巢で発展し、さらに練物で作られるようになって鴻巢名物となる。熊谷・川越・大宮・越谷・鴻巢など武州一帯では一七世紀中期すぎころから野間稼ぎとして雛人形の製造がはじめられていた。その中で鴻巢では一七世紀後期になると、この地域一帯で盛んになった桐箆製造の際、多量に出る大鋸屑を用いた練り物を開発し、好評を博すようになったのである。これは鴻巢は江戸との関係が密接であったため、おそらく早い段階から江戸の情報が入り、浅草を真似て赤物を製造していたからではないかと考えられる。ともあれ一七世紀中期すぎには鴻巢でも雛製造をはじめていたとすると、浅草はそれより早かった筈であるから、この場面は一七世紀中期以前ということになるのではないか。

はじめに

最近では歴史的研究の各分野で屏風や絵巻物、絵図などの絵画類を史料として扱うようになってきた。そうした絵画類には文献には出てこないような非常に多彩な情報が盛り込まれている。したがってこうした絵画史料を積極的に歴史研究に取り入れることは歴史学にふくらみを持たせるものとして、非常に有効である。その意味で今日は史料の再発掘時代ともいえるだろう。しかしこれにはこれできれいと難しい問題もあり、その中のもっとも基本的な問題の一つとして、描かれているものが何であるかを読みとることがある。実はこれがかなり難しい事で、何が描かれているかわからないものが結構ある。とくに都市風俗を描いた屏風絵などの場合、大画面という制約上、細部はかなり省筆されているため、一体何をしているのか、何を持っているのか、店の場合でも何の店なのかなどということが、なかなかわからないものが多い。したがってこうしたものを読みとるという作業自体が研究であるということでもあるわけだが、ともかく絵画を史料として扱ううえでの基礎的な作業として、先ずこの「何が描かれているか」を読み解くことが必要であろう。そこでそのためのささやかな試みとして、「歴博本江戸図屏風」の中に描かれている人形を飾った家について考察してみたい。

一 人形を飾った家はなにか

「歴博本江戸図屏風」の右隻第五扇、六扇のそれぞれの下部に人形を並べた家が描かれている(写真1、2)。この家について言及されたのは、今までのところ平凡社版『江戸図屏風』(鈴木進編、昭和四六年)だけのようにだが、これでは次のように説明されている。

正月と五月があるのだから、三月はないだろうかと探してみたところ、かろうじてささやかな三月節句が描かれていた。それは右隻第五、六扇の各下端に近く、浅草橋と浅草寺とを連ねる道(いうまでもなく当時の奥州街道である)に沿う民家にひっそりと、人気なげな表座敷に、数個の雛人形が置かれている光景である。それは二ヶ所に見えて、向かって左(南)の分は、座敷に五個の人形が見える。左から一對の立雛、一對の立・坐雛(女雛が低く作られているのであって、坐雛ではないかもしれぬ)、以上はすべて赤色が塗られ、右端には犬の形が一個、黒色で頸の部分のみ赤く塗ってある。もう一ヶ所の方は四個で、右側のは赤褐と赤の素朴な一對の雛であるが、左側のは一つは薄赤色の小袖らしいものを着て長い裾を見せるものと、一つは上半身赤、下半身白の姿で、ともに女性の風俗人形かと思われる。いずれにしても素朴なもので、以上九個の人形はいずれも伏見人形に代表される土製の雛であろう。もっともこの屏風では、人形がこうして置かれた以外は三月節句としての徴証は何一つない

から、これだけで三月節句と断定するのは無理かもしれない。(萩原龍夫「江戸図屏風に描かれた年中行事芸能」)

要するにここでは若干保留しながらも、これを年中行事の一つ、三月節句を描いたものと解釈されている。したがってこの人形の置いてある家も普通の家、つまり人形店ではないということになる。また人形についても、第六扇の方が立雛一對と立・坐雛一對と犬の五ヶ、第五扇の方は雛一對と女性の風俗人形二ヶの四ヶとして、雛人形とされている。

だがこの解釈には少し無理があるのでないだろうか。まずこの二軒の家をよくみると、どちらもたしかに畳敷きの上に人形が置いてあるが、これらの家は道側にはばったり床几式のタナがついていて、しもたやでないことは明らかである。

また人形についても、たしかに素朴な形からみて土人形あるいは張子人形であることは間違いないようであるが、果たしてこれが対になった雛人形なのだろうか。まず対にしてはあまり大きさや形がばらばらに過ぎるようだし、その上雛人形にしては赤一色というのは少しおかしいのではないか。その意味ではむしろ女性の風俗人形とされている方が雛人形に近いようにみえるが、いずれにしても雛祭りではないだろう。

とするとこの家は人形店だということになる。そこでこの地域と人形店の関係と、人形の内容についてももう少し詳しくみていき、「人形を飾った家は何か」を考えてみたい。

二 浅草橋通りの人形店

まず人形店か否かであるが、たしかにこれでは人形店というにはあまりにも数が少なすぎる。しかしこの屏風の描き方をみると、他もすべて非常に省略した描き方をしている。したがってこの場合も人形店であるという一種の記号として描いてあるとみれば納得できるのではないか。それにもし普通の家で飾る場合は、このような並べ方はしない筈である。江戸時代の風俗画をみるとたいてい小屏風の前に並べている。少なくとも小机の上などに並べて飾るのではないか。だが人形店なら道路に向けてこういう並べ方するのは至極当然である。

次にこの家のある場所である。この通りは浅草寺の門前通りだと考えられ、並んでいる家はいずれも店舗のようである。しかも道の端にござを敷いているトコロ天売りや茶売り坊主もいることからみて、かなり賑やかな通りだということがわかり、こういう場所にあるということは、この家も店屋である可能性が高い。その上この屏風の描き方からすると、二軒も人形屋が描かれているということは、実際には人形屋が多い通りだったということになる。ちなみにやはりこの通りで第五扇の右端に紙屋が描かれているが、浅草は浅草紙の産地として有名であった。すでに寛文四(一六六四)年の『浅草地名考』に浅草名物として載っている。にもかかわらず店としてはたったの一軒しか描かれていないことからすると、人形屋が二軒も描かれているということは、人形屋が多いことで



図1 「寛文延宝期の江戸町地分布図」の浅草橋通り付近

も有名だったということを示していると考えてよいのではないか。

そこでこの場所の位置をもう少し正確に検討してみると、貞享四（一六八七）年の『江戸鹿子』に、次のような記述がある。

浅草橋通 南ハ浅草はしより北へ追分迄

かや町三丁 天王町 片町 森田町 はたこ町式丁

文殊院前 黒船町 すわ町 駒形丁 並木丁式丁 竹

町

諸職売物 はり貫人形 土人形類 絵馬

土人形問屋 かや町一ひなや七兵衛

つまり南は浅草橋から北へ向かって追分までが浅草橋通だということである。地域を確認するために、これと时期的に近い「(玉井哲雄編)寛文・延宝期の江戸町地分布図」『国立歴史民俗博物館研究報告二三集』一九八九)をみる。図1にみられるようにたしかに浅草橋から北へ向かって、かや丁、かや丁二丁目、かわら丁、天王丁、かた丁、はたご丁、黒舟丁、スハ丁、駒形丁、並木茶屋、花川戸丁、山宿丁と続いている。多分一里塚があるところが追分だと思われるから、町名には多少違うものもあるが、浅草橋通りがこの範囲だったことは間違いない。

次にこの地図と「歴博本江戸図屏風」を比較してみる。第六扇の左下端に描かれているのが浅草橋である。従ってここからはじまり、第五扇の人形のある家あたりまでが、ちょうどこの浅草橋通りに当たっているとみてよいであろう。この間に前記のような町が並んでいたことになる。またこの通りには、はり貫人形、土人形類、絵馬、さらに土人形問

屋もあったというから、この通りは、人形屋の通りだったことがわかる。

これによってここに描かれているのが人形屋であることは間違いない。しかもはり貫人形(張り子人形)とか土人形類を売っていた店だったというところで、たしかに描かれている人形とも符合している。絵馬屋らしい店も六扇の中央、馬に乗った人物の右に描かれている(ついでにいうと駒形丁の北西、並木茶屋の西はかみすき丁となっており、ここが浅草紙の産地だったことがわかる)。ここは浅草寺の門前町であるから、浅草寺参詣の土産物屋が並んでいたであろう。

なおこの地域はその後江戸時代を通して人形屋の集住する地域だったことが、次のような史料からわかる。

『境内(浅草観音)惣見世連上帳』(安永七(一七七七)年)

仁王門外西側はり子見世

新右衛門 卯右衛門 市右衛門 清兵衛 藤十郎 弥兵衛

半兵衛 八右衛門 卯平治 宇右衛門 和助 八右衛門

仁王門内西側

半右衛門

仁王門外西側

伊右衛門

『江戸名物鹿子』(享保一八(一七三三)年)

浅草はり子

春風にいさみを見せつ土産鹿

『江戸買物独案内』（文政七（一八四二）年）

雛人形問屋 茅町組

浅草茅町一丁目 吉野屋治郎兵衛 池田屋利兵衛 松坂屋喜右衛門

尾張町一丁目 平松屋藤兵衛

馬喰町三丁目 吉野屋助七

通油町 加田屋喜助

浅草御門外 柏屋伊兵衛

池之端中町 大槌屋平兵衛

室町二丁目 柏屋四郎右衛門

本町二丁目 丸角屋次郎兵衛

両国薬研堀角 伏見屋宇兵衛

浅草駒形町 吉屋半兵衛

こうした状況は近代に入っても続いており、今日でも浅草は雛人形屋の多い町として知られているが、上記の史料をみると、一八世紀前期の『江戸名物鹿子』までは、土人形、はり子などと書かれていて素朴な土人形や張り子人形を売る「見世」だったことがわかる。だがそれから一世紀後の一九世紀前期の『江戸買物独案内』になると「雛人形問屋」となっている。雛人形と呼ばれるように人形の質が変わった事、問屋が増え、全体的に商いの規模も大きくなっていることがうかがえる。後述するようにこの間に雛人形は大きな発展を遂げるわけだが、一八世紀から

一九世紀にかけての産業の急激な発展、とくに江戸における消費文化の発展が、このような面にもみとれる。

三 疱瘡除けの赤物

次に人形についてみてみよう。最初にもいったように、雛人形としては赤一色というのは少し変であるし、第六扇の右側の立・坐二つなどは一対とは考えられない。また第五扇の右側の二つも大小の大きさが違いすぎて一対としては不自然である。その点ではたしかに、右側の二体の方が雛人形らしい。

そうなるとこの赤い人形は何なのかということになるが、これはおそらく疱瘡除けの護符に使われた、いわゆる疱瘡人形だと考えられる。種痘が普及する以前、天然痘は人々のもっとも恐れた伝染病の一つであった。高熱とともに赤い発疹が出て膿疱となり、後に斑痕化してあばたになる。感染率も一〇〇パーセント近く、死亡率も高かった。日本で種痘が始まったのは幕末の安政五（一八五八）年からで、蘭方医たちが神田お玉が池に開放した私営の医療機関で始めたものである。だが明治に入っても一万人もの死者を出す大流行が四回もあり、まだ疱瘡は恐ろしい病気の一つであった。もちろん昔はこれがウイルスによるものだということはわかるはずもなかったため、疱瘡神という疫神によって発病するものと信じられていた。このためもっぱら疱瘡神に祈る事が唯一の疱瘡対策であった。そして一旦患った場合には、疱瘡祭といって枕元に祭壇



図3 疱瘡まつり『小兒必要養草』(香月牛山・1703)



図2 疱瘡まつり『疱瘡心得草』
(志水軒朱蘭・1798)

を設けて、神様のご機嫌を取り、何とかご退散願ったのである(図2、3)。

(前略)人其子を受するあまりに、除夜に疱の神とて燈燭をかかげ、媚へつらふのみかは、其嬰兒熱出て、痘と見るやいなや、棚をかざり供物を列ね、敬屈する事、明神に仕るがごとし、此礼敬のあつきに乗じて、邪霊恣に其兒を侵に至る(後略)。(『南嶺子』寛延三(一七四六)年)

とある通りであった。

疱瘡神には赤がつきものとなっていて、供えるものも、疱瘡の時に着る物も食べる物もすべて赤が使われた。祭壇に供える幣束も蠟燭も団子もそうだし、食べ物も赤飯、赤鯛にし、枕屏風にも赤い布をかぶせたり、紅絵、赤絵とよばれた疱瘡絵を貼り、赤い着物を着せるといようにすべて赤づくめ、看病のために病室へ入る際にも赤い着物を着たという。

「屏風、衣桁には赤き衣類をかけ、そのちこにも赤き衣類を着せしめ、看病人もみな赤き衣類を着るべし。痘の色は赤きを好しとする故なるべし」と『小兒必要養草』(香月牛山・元禄一六(一七〇三)年)にもある。「小兒医者赤い紙燭でおくられる(『柳多留』)」という句なども、疱瘡を患った子供の往診に来た医者を、赤い紙燭を持って戸口まで送っているところである。疱瘡児の見舞いの菓子や煎餅の袋なども赤一色で絵が刷られ、玩具も赤、絵草紙も表紙からすべて字も絵も紅刷りであった。

古来赤という色は呪力を持つと信じられている。これは汎世界的な現象で、血の神聖性とか、太陽や火への崇拜に由来するとされており、

「赤」という漢字も大と火が結合したものだという。疱瘡神と赤色の結びつきも、こうした思想が民間信仰化したもので、赤色の強い呪力によって恐ろしい疱瘡神を押さえつけようというのである。このため玩具や疱瘡絵の題材にも春駒、鯛、羽子板、宝舟、金太郎、桃太郎、鎮西八郎為朝などのようなめでたいものとか力強いものが多く用いられた。

しかしこのように個々の家で疱瘡祭りをするようになったのは、さほど古い事ではなく、それ以前は疱瘡神を追い出すために町内で種々の嘸物をしていたようである。

文明三年後八月六日、稱送疱瘡之惡神之由、(略)所々有嘸物毎日事也、七日、今日町送疱瘡之惡神有嘸物、室町殿御門前、北小路殿御前等可渡之、或仁構棧敷招請之間、罷向了、見物不相応也、種々有嘸物、(『親長卿記』)

これは室町時代の京都のことである。このような嘸物は、やすらい祭りといって古代から行われていたものである。調査不足かもしれないが、個々の家で赤物の人形を飾って疱瘡祭りをするようになるのはどうも江戸時代になってからのようである。さきの『小児必要養草』をみてもわざわざ赤物を使うように指示しているところを見ると、この本が出た元禄前後、あるいはそれより少し前あたりではなかったかと想像される。

ともあれこうしてみると、この浅草通りの人形店に描かれている赤い人形が疱瘡人形である可能性は非常に高い。疱瘡はとくに罹患者、死亡率とも乳幼児が高かったため、普通の玩具にも赤物が多く、赤く塗る必

要のない猫や虎、犬張子なども赤く塗っていたことから、赤物玩具というものの需要はかなり大きかったと想像される。しかもこうした厄除けというものは神社と関係が深いことから、神社の門前や境内で売られていたということはきわめて自然である。⁽¹⁾

もともと神社に参詣するという事自体が、厄除けとか無病息災、家内安全を祈願するためである。ちなみに浅草寺には疱瘡と並んで江戸時代もっとも恐れられた麻疹よけの呪物対象もあった。仁王門の西にある神馬所の神馬の飼葉桶を被ると麻疹が避けられるというのである。この神馬所も「歴博本江戸図屏風」に描きこまれている(写真3)。

以上みてきたことにより「歴博本江戸図屏風」の第五扇、六扇に描かれている人形を飾っている家は、人形屋であること、そしてここに描かれている赤い人形は疱瘡人形であるといつてよいだろう。

したがってこれでとりあえず本論の目的である「何が描かれているか」という問題については済んだのであるが、この人形が疱瘡人形であるということを前提とした上で少し横にそれて、人形の産地という問題について考えてみたい。

四 鴻巣と浅草

実は赤物といえば、江戸の近くでは埼玉県鴻巣(写真4)が古くから有名である。鴻巣(図4)を含めて埼玉県は江戸時代から人形産地として有名で、川越、岩槻、越谷などでもさかんに生産が行われていた。

その中でもとくに鴻巣は、「鴻巣の赤物」といって疱瘡除けの人形産地として有名であった。鴻巣はこの「歴博本江戸図屏風」にもかなりの重さで描かれているが、この浅草の赤物と鴻巣の赤物とは何か関連があったのではないかと想像されるので、この点をみることにする。

まず鴻巣宿で人形の製造が始まったのはいつかということである。一説によると貞享頃といわれるが、これは後述するように史料裏付けに欠けるため一応除外するとして、元禄年間には武州地方で雛の製作が行われていたようで、次のような訴訟文書がある。文久二（一八六二）年に江戸雛仲間が武州雛仲間を訴えたものである。

一、雛渡世差障出入ニ付答書

（前略）雛職分の儀は、昔古より仕来乍恐 元禄九丙子年正月中より当御知行所ニ相成、高不足籠田地故職分ならでは渡世難取統、右職分願濟之上為冥加永弍貫五百文宛年々上納仕、鑑札弍拾八枚 戴之、農間一体ニ手合仕、他之職人共一切雇不申取掛候筈ニ（以下略）

武州雛の生産が増大し、江戸の雛職人を多数引き抜くようになったこ

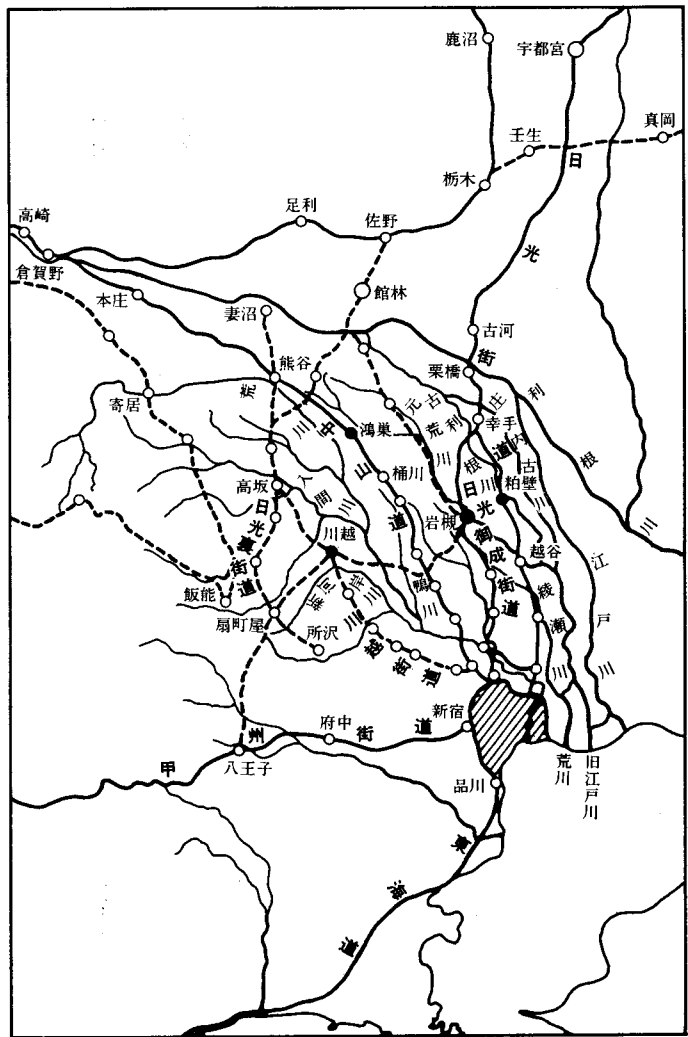


図4 江戸時代の関東地方交通路

とから、製造にさしつかえるようになった江戸の雛仲間が武州雛仲間を相手に訴訟におよんだということである。これによってすでに元禄九（一六九六）年の時点では野間稼ぎとして雛作りが行われていた事はたしかである。また訴訟をおこしたのは浅草瓦町の文七を代表とする江戸の雛仲間一番組一七名で、これに対する武州雛仲間は熊谷宿（二名）、川越宿（一名）、大宮宿（一名）、越谷宿（一三名）、入間郡（三名）、上谷新田（鴻巣）（一名）、北河原村（三名）、四丁野村（一名）の二五名



図5 「享保の此の土雛図」『骨董集』
(山東京伝・1813)

から成っており、この時期には武州がかなりの産地になっていたこと、浅草と武州の雛仲間とは関係があったこともわかる。

元禄期は周知の通り江戸の一大発展期であったから、雛人形なども商品として発達し始めたのであろう。元禄三(一六九〇)年の『増補江戸惣鹿子名所大全』でも江戸の中橋の雛市がこの時期から出てくる。おそらくこうしたことに対応してこの時期に武州も産地として発展し始めたものと考えられる。

ただし元禄期の雛はまだ後のような豪華な雛人形ではなく、素朴な土人形だったらしい。山東京伝の『骨董集』(一八一三)に「享保の此の土雛図」という図がある(図5)。高さ五寸余りで、土で作り素焼きにし、表面に胡粉や丹、緑青で彩色をした民芸風の雛であるが、このよう

なものではなかったかと想像される。

着付け雛と呼ばれる後の雛人形の原型は「次郎左衛門雛」で、これは享保年間(一七一六―一三三)に京都の菅屋次郎左衛門が考案したものだといわれる。これはそれまでの土雛と違い、美しい衣裳を着せた贅沢なものだったため、大いに賞賛され、宝暦年間(一七五一―一六四)には江戸の室町二丁目にも雛店を開いたところ、大人気を博したという。その後寛政年間(一七八九―一八〇一)に江戸十軒店(本町二丁目)の人形師原舟月がこれをさらに改良して「古今ひな」と名づけた新型の内裏雛を考案した。これは両眼に瑠璃玉を使用、衣裳には金銀糸の縫紋を施すなど技巧をこらして精妙に作られたもので、以後の江戸雛の典型として続いてきている⁽³⁾。

一八世紀始めから中頃にかけて雛人形が急速に豪華になっていったということがある。雛に対する奢侈禁令が多く出されるようになるのも、ちょうど享保期からである⁽⁴⁾。こうした経過からみると、武州雛も元禄期にはまだ素朴な土雛であったと思われる⁽⁵⁾。しかし文久年間にあのような訴訟事件がおこっているということは、一九世紀中ごろには江戸の雛と同じものが作られていたのであろう。

五 鴻巣の練物による赤物

さて鴻巣である。鴻巣雛も武州雛仲間として同じ歩調をとってきていたようであるが、鴻巣では赤物も作っていたこと、しかもこれが普通の

張り子人形ではなくて練物であったという事である。練人形ともいうが、これは桐のおが屑を生麩糊で練り、型に入れて抜いたものを乾燥して表面に彩色したものである。有坂與太郎『日本雛祭考』（建設社・一九三二）には日本中の座雛産地があげてあるが、この中で鴻巣のみが「着付並練物」となっており、さらに「別に『赤物』と称する練物中に大小数種の座り雛が製られている。（略）：販路の広大な事は地方雛中、随一であらう。」と記されている。鴻巣が練物の産地として有名であった事がわかる。

では鴻巣でそうした赤物、ないしは練り物が作られるようになったのはいつからか。この点に関して『玩弄物製造沿革誌』（埼玉県武蔵国北足立郡鴻巣町大字鴻巣字人形町玩弄物製造沿革誌）に次のような記述がある。大正初年に大正博覧会に際して鴻巣雛人形師関口磁五郎が著したものである。

（前略）一、本業ノ創始ハ、天正年間京都伏見ノ人某ナル者此地ニ居住シ、土偶ヲ製シテ販売セシニ始マルト云ウ、其経歴詳カナラス、爾後萬治・寛文ノ交ニ至リテハ、土偶ニ加フルニ小雛ヲ以テシ、随テ製作家モ亦拾余戸ニ至レリ、降テ明和・安永年間ニハ其技ノ稍進歩シ練物ヲ以テ土ニ替ヘ、所謂際物ノ全部ヲ製造スルニ至ル、文化中ニ至リテハ製造家漸次数ヲ増シ、二十八戸ト為リ、当時ノ江戸練習ニ來ル者多ク、鴻巣雛ノ名声聞左ニ鳴ル（後略）

これによると一六世紀後期過ぎの天正年間に京都伏見からきた者が土人形を作ったのが最初で、一七世紀半ば過ぎの萬治・寛文期には、土人

形の他に小雛も製造するようになって、人形屋も十軒余に増えた。さらにその後、一八世紀半ば過ぎの明和・安永年間になると、土人形が練物に変わり際物一切を製造するようになり、一九世紀に入ると二十八戸にも増え、江戸からも習いに来るようになった、ということである。ここでいう際物とは季節や流行によって売り出される品物であるから、当然赤物も入る。

これに対し、『雛と人形』（昭和四九年・鴻巣市節句品協会）で、伊藤憩石氏は、創業期については根拠がないとして否定し、貞享年間起源説をとなえている。根拠は、鴻巣市上生出家の生出家神社の御神体である天神像の銘文に「奉造天神之形諸願成就祈所京烏丸通左 京法眼孫弟子 仏師藤原吉岡鴻巣町作之 政位（夷）大將軍左大臣源家継公御代之御 貞享四丁卯年九月二五日」と書かれていることによっている。

この天神像は高さ三〇センチの木座像で、首差しになっており、空洞になった体内にこの銘文が墨書された木板が入っていた。しかしこれだけでは、貞享期に京都系の仏師が鴻巣に来て天神像を作ったというだけである。今のところこの他には証明する資史料がないので、貞享起源説もこれ以上はなんとも言えない。

鴻巣雛に関する史料としてはさきの訴訟文書にあった元禄期が最も古く、このあと文化・文政期（一八〇四―一三〇）の『新編武蔵風土記』がある。これには「上谷新田は（略）鴻巣宿にも接し、北は上下生塚村に交はれり、民家六十街道の左右に軒を並べ、耕種の暇、雛人形なるものを製し諸方にひさぎて生産の資となす」とある。『玩弄物製造沿革誌』

の「文化年中ニ至リテハ…」は、これに基づいているのかもしれないが、ここでは六十戸となっている点は違う。しかしその前の、萬治・寛文頃に土偶に小雛が加わったことと、明和・安永頃に土偶から練物に替わったことについては裏付ける資料がない。ただこの時期あたりになると何らかのいい伝えがあったのではないかと思われる事と、このうち明和・安永頃に土雛から練物に替わったという点に関しては、箆筒製造との関係をみて蓋然性が高いものと考えられる。というのは練物の原料である桐のおが屑が桐箆筒製造の際、大量に出るためである。

埼玉県における桐箆筒の製造は川越あたりではかなり古くから行われていたと考えられるが、江戸向けの産地として鴻巣、岩槻、粕壁、越谷などが農閑稼ぎで盛んになるのがちょうどこの明和、安永頃からである。従って鴻巣の土人形が練物に替わったのも、おそらく桐箆筒の製造が盛んになっておが屑が多量に出るようになったためであろう。当時は、製材するのに大鋸を用いて挽いていたから、その際出されるおが屑も膨大な量であった。

練物は土製に比較して軽し、割れる心配もないため、土産物としては最適である。鴻巣はもともと『新編武蔵風土記』にあるように街道筋で、土産物の産地であった。このため土人形だけでなく、張り貫人形も作っていた。張り貫と練物とは軽くて土産物向きであるという点で共通している。しかも製作は練物の方が張り貫より簡単である。したがって材料の大鋸屑がいくらでも、しかもおそらくただで手に入るようになって、早速練物が開発されたのであろう。

江戸からも習いに来るようになった、というのはオーバーかも知れないが、ともかく練物にしたことで鴻巣の人形は商品としての価値を高め、特産物としての地位を不動にしたのはたしかであろう。またもし習いに来たというのが本当なら、この頃には既に江戸Ⅱ浅草では際物は作らなくなっていたのではないか。

こうしてみると練物に替わった時期については一八世紀半ば過ぎということでよさそうであるが、ではなぜ鴻巣で「赤物」が始まったのかである。

これについては、浅草というか、江戸との関係だったと思われる。浅草と鴻巣は奥州街道沿いである。鴻巣は江戸期を通じて天領であったし、中山道の宿駅の一つであり、荒川を通して江戸への物資運搬には非常によい位置にあった。もともとこの地方と江戸とは密接な関係にあり、川越、大宮、岩槻、鴻巣は家康以来の獵場で、家光も頻繁に遊獵している。そうした際の將軍の宿泊所である鴻巣御殿も文禄二(一五九三)年に建てられている。当然、鴻巣には浅草の情報も早く入ってきたであろうから、浅草で瘡瘡人形が売れていると聞けば、さっそく真似て作るということになったのではないか。練物になったのは一八世紀半ば過ぎだとしても、元禄期にはすでに野間稼ぎの産地になっていたという事は、赤物もそのころから作られていたのかもしれない。あるいは浅草で作らなくなつて代わりに鴻巣で作り出したのかもしれない。

そうすると本家の浅草ではいつから赤物を作り始めたかである。元禄期の『小児必要養草』の記事からすると、まだ瘡瘡と赤ということが完

全には知れ渡っていないようであるから、この前後、あるいは少し前あたりかと考えられるが、今のところこれ以上はわからない。

以上、「歴博本江戸図屏風」の浅草橋通りに描かれている「人形を飾った家」は、人形屋であること、この付近は人形屋の多い場所であったこと、売られている人形は抱瘡人形の赤物であることを確認し、鴻巣の赤物は、この浅草にヒントを得て始まったのではないかと推定を試みた。浅草で赤物が売られていた時期についてももう少しはっきりしたことがわかれば、屏風の製作時期に対しての一つの情報提供ができたであろうが、史料不足でそこまではいかなのは残念である。

註

- (1) 他にも寺社の境内で抱瘡人形を売っている例として、「渡辺本六曲一双江戸図屏風」(宮川一笑、享保期(一七一六—一七三六))がある。芝明神境内の人形屋で赤い抱瘡人形が売られている。
- (2) 『埼玉の雛人形』(埼玉県民俗工芸調査報告書第6集・一九八八・埼玉県民俗文化センター)の付編に「鴻巣人形関係史料」として訴訟関係一件文書がある。

- (3) 『東都歳時記一』(齊藤月岑・天保九(一八三八))に次のようにある。
 今日(二月二日)より三月二日迄雛人形同調度の市立、街上に飯屋を
 補理ひ、雛人形諸器物に至る迄、金玉を鏤め造りて商ふ。是を求人、
 昼夜大路に満てり。中にも十軒店を繁花の第一とす。内裏雛は、寛政の
 頃江戸の人形師原舟月といふ者一般の製を工夫し、名づけて古今ひひな
 などいふ。是より以来世に行れて、大かた此製にならへり。

十軒店本町 尾張町 人形町 浅草茅町
 池之端中町 牛込神楽坂上 麴町三丁目

- 芝神明前。
 (4) 『享保集成絲倫録』によると享保六(一七二二)年、二〇(一七三五)年、寛政元(一七八九)年の三回に亘り禁令が出されている。享保六年七月の禁令は次の通りである。

覚

- 一、雛八寸より上無用たるべし、近年結構なるひな段々これあり候間、次第を遂て軽く仕るべきこと。
 一、同じく諸道具梨地他は勿論、蒔絵無用に仕るべく候、上の道具たりとも黒塗に仕るべく候、金銀のかなもの無用たるべきこと。
 一、子供もてあそびに致し候人形、八寸より上は仕出し申すまじく候、惣してもてあそびの作りものたぐい、自今金銀の彩色、金八並びに純子等の衣裳、又は人形類台にのせ候儀、一つ宛のせ候はかくべつ、二つより上のせ候作りもの無用に致し、すべて結構に仕るまじく候

右の通り来る寅の正月より吃度相心得べく候。作り物のたぐい当年中商売の儀は勝手次第仕るべく候、来年より有合せ候とも右の品々商売致し候儀、停止たるべく候こと。

- (5) 鴻巣市内で『骨董集』の土雛に極似している十数点の土雛が発見されている。
 (6) 『簞笥』(小泉和子・ものと人間の文化史46・一九八二・法政大学出版局)七〇頁—八六頁参照。

参考文献

『埼玉の雛人形』(埼玉県民俗工芸調査報告書第6集・一九八八・埼玉県立民俗文化センター)

(生活史研究所 国立歴史民俗博物館共同研究員)

The Folding Screen Entitled "Edo-zu (Picture of Edo Town)" Owned
by the National Museum of Japanese History and
the Kōno-su dolls

KOIZUMI Kazuko

The bottom of the 5th and 6th panels on the right section of the folding screen entitled "Edo-zu" owned by the National Museum of Japanese History, there are houses many dolls are arranged. We can see this is a doll shop and these dolls are clay dolls or papier-mâché dolls painted in red, which were thought at that time for spiritually protecting infants against smallpox. This place in the drawing can be identified the temple town of the Sensōji (located in Asakusa), which had been a production center of dolls from the Edo period to modern times. This is confirmed by many local historical documents, including the "Edo Kanoko" written in the 4th year of Jōkyō (1687). The early dolls were of simple clay and papier-mâché. Later, they were changed to the dolls called "Hina Ningyō" which wore kimono, since the Kyōhō era at the beginning of the 18th century. Because all the dolls in this drawing were simple, it follows that the date of the scene of this drawing must be before the 18th century.

The dolls painted in red, which were first created in Asakusa, later developed in Kōnosu in Bushū (Kantō area), and only became special products in Kōnosu *after* they were made of plaster. All over Bushū including Kumagaya, Kawagoe, Ōmiya, Koshigaya and Kōnosu, they started producing such "Hina Ningyō" as a job during the farmers' leisure season just after the middle of the 17th century. In Kōnosu, especially they developed a new plaster using the sawdust in great supply from the increased manufacture of the paulownia-wood chests of drawers in this area, at the end of the 17th century; and the dolls made in Kōnosu received favorable reputation. It may be that they had examples from Edo in the early stage because they kept close connections with the Edo people and produced dolls painted in red imitating those made in Asakusa. If they also started producing "Hina Ningyō" in Kōnosu by the middle of the 17th century, then the date of their production in Asakusa must have been much earlier. It means that the date of the scene in the drawing could be fixed more definitely as being before the middle of the 17th century.



写真1 「歴博本江戸図屏風」 第五扇の人形のある家



写真2 「歴博本江戸図屏風」 第六扇の人形のある家



写真3 「歴博本江戸図屏風」浅草寺仁王門西の神馬所



写真4 鴻巣の抱瘡人形（明治時代）